教科教育キャリアアップフィールド

言葉への関心を引き出す方法の研究・開発
――大学研修・第１日講義について――

国語教育専修　佐　藤　貴　裕

岐阜県教育委員会がおこなう現職教員の「12年目研修」の「大学研修」を担当して４年になる。このあたりで取り組みを振りかえっておきたい。

担当コースの第１日には，佐藤の講義を配することにしている。そのようにした意味と内容についてはのちに記すが，この講義が研修受講者にどのように受け入れられているのかを把握することが必要である。それをもとに補うべきは補い，改めるべきは改め，よりよい研修に向かわせたく思う。

1　担当コースの概要と運用の実際

担当するのは，研修科目名「言葉への関心を引き出す方法の研究・開発」である。全体的な内容を大まかに記しておこう。受講者にも配布される資料には次のように記してある。なお，以下に述べる都合から，文番号（文１）～（文３）を付けてある。

> （文１）児童・生徒たちに言葉への関心・興味・好奇心を起こすような授業を展開するために，どんな工夫がありうるかを考える。（文２）まず，教授者みずからが，言葉への関心をもちたいものである。（文３）また，各自の工夫を披露しあい，情報交換し，よりよいものに高めていければと思う。

（文１）は本研修の最終的な目標である。それは，３日間の各自の研修結果としてしめされる第５日の授業案合評会（文３）で具体的に示されることになる。こうした流れを想定しているが，意欲的に取り組んでもらえるような動機づけとして（文２）のような方向づけが必要である。それが，研修第１日の佐藤の講義の役割である。

2　第1日講義の概要

第１日講義の概要を目次風に示しておく。なお，これは，佐藤の心づもりのものであって，実際に講義したものがほとんどではあるが，進捗状況や受講者の興味・関心・受講態度等により，割愛した部分もあったり，臨時に加えたものもあったりする。また，内容についても，重要なものから息抜き的なものまでさまざまである。

1 国語辞典から

(1) 語釈の比較　　老女と老婆／天真爛漫／動物（動物園）／馬鹿……

(2) 工夫の数々　　見出し表記／音声表示／用例

(3) 垣間見る日本語の姿　アクセント／仮名づかいシステムの不備

2 日常語と言語変化

(1)「ありませんでした」

(2)「見れる」の正しさ（？）

(3)「ことばの乱れ」論議

3 発音と意識

(1) 日常語の発音　　雰囲気／全員／体育（知育・徳育）

(2) 音韻（意識の音）と音声（実際の音）　さまざまな「ン」／二つのズ

(3) 発音器官

(4) 五十音図の配列　大きな切れ目／室町時代の謎々／さらに細かく

4 仮名が生まれるまで

(1) 数字歌――導入例として

(2) 万葉仮名の面白さ　山上復在山／左右／十六（猪）（戯訓）

5 身についた言葉ルール

(1) 数字の呼び方

(2) 発音と文法　　「一」の読み方／「一蝶」／「一本・二本・三本」

(3) 語感　　千の天使がバスケットボールする／和語・漢語・外来語

6 言葉の旅・言葉への旅

(1) 伝播する言葉　　口裂け女／蜻蛉／麦粒腫（言語地理学の入門と演習）

(2) 岐阜の言葉　　「スケッチしずに」の先進性／室町時代語とヤロー・ヤラー

(3) 地名の楽しみ　　野口五郎岳／読書村／日本国（山，字名）／新幹線／三朝

7 国際化時代によせて

(1) 思考と言語　　「名前がある」ということ／言葉とモノ／切手の買い方　ほか

(2) 言葉と人権の基礎

(3) 言葉を学ぶ意味

3　講義に対する感想文（抜粋）

2006年度の受講者には，講義の感想を書いていただいた。それを，上記の講義内容を反省する手がかりとしたい。以下に受講者5名の感想文の一部を掲げる。

A

佐藤先生は，「日本人なら日本の文化や歴史をどの国より知っていなければならない。国語の教育を通して，日本的な発想を身につけさせたい。」とおっしゃられました。この講義では，たくさんの言葉の持つ美しさや面白さ・巧みさに触れることができて，とても楽しかっ

たです。

心に残った内容を２つ書きます。１つ目は，（中略）

２つ目は，「語感をみがく」ということについてです。佐藤先生は中原中也の「宿酔」という詩や，岡井隆の短歌を例に，その解釈について教えてくださいました。言葉の裏にあるその人の思いをつかみ取るには，自分の感覚ではなく，その時代背景やその人の生き方についても考えることで，よりその人の感覚に近く深い解釈ができるのだと分かりました。そう考えると，言葉はとても面白いです。子どもたちにもそんな思いを味わってもらえるような教材や授業の開発をしたいとこの講座を受けて強く感じました。

B

小学１年生の息子は，天気予報を見るたびに「地獄（四国），中国，牛乳（九州）」と言います。いつも訂正するのですが，なかなか直りません。今回「カマキリ」を指す方言「オガマ」が「オママ」に変化した話をお聞きし，「息子は耳慣れない『四国』を，耳慣れた『地獄』という言葉に置き換えているのだ」と分かり，それがとても自然なことであることを知って，おかしさがこみ上げてきました。

また，生徒がよく口にする「違えよ（ちげえよ）」について，動詞でありながらも形容詞的な意味を持つという「違う」の特徴や，形容詞の語尾の変化から考えると，ごく自然な変化であることを知りました。同じように考えると「違くない？」も説明できることには感激しました。同時に，今まで「言葉の乱れ」の一言で片付けていた自分を反省しました。「言葉は変化していくもの」と生徒に話している私自身が，「言葉の変化」や「自分が使っている言葉との違い」を否定しているという矛盾に気づいたからです。

「『自分が使っている言葉との違い』を否定する私自身」は，最後に先生がお話された「国際的な人」には，ほど遠いです。日米間の緊張が高まる中，敵国の言語を賞賛したウォーフの考え方には衝撃を受けました。相手を理解しようと思う気持ちだけでなく，自分たちの国語に確固たる自信があったからこそ，できたことだと思います。

「国際化社会に生きる生徒を育む」ために，英語だけでなく社会科や総合的な学習など，さまざまな場面で，外国の文化を理解する土台をつくる教育がなされています。しかし，それだけでなく，相手を理解する態度を支える「自国の文化のすばらしさを知り，愛する気持ち」を育むような教育の必要性も強く感じました。

ほんの少し，日本語の美しさや不思議さに触れるだけでも，多くの感動がありました。この感動を少しでも生徒たちに伝えられる教師になるためにも，言葉に対する感性を磨く研修にしていきたいと思っています。

C

2，国語辞典はおもしろい

新明解国語辞典では，老婆と老女のように，似たような意味をそろえて提示する意図がある。老婆を【年をとって年輪の古さが目立つ婦人】と解説。老女の【年をとった女性・上品な人の意にも無力な存在の意にも用いられる】との違いを示している。文章の中で，老婆と使う

か老女と使うかにこだわる意味がわかる。込み入ったバスを一人バス停で待つのは，老女か老婆か。適度に人が乗っているバスを待つのは老女か老婆かというと・・。動物の解説を読んでさらにおもしろさを痛感。国語辞典を引くだけでなく，読んでみたいと思った。小学生にはちょっと無理かもしれないが，中学生にはこんな引き方もできそう。

4，音声学

言葉の教室に通っている子や，そこまではいかないが発音が？と思う子がどこのクラスにもいる。舌の位置を確認させる指導も大切なのだと思う。声帯の振動があるか無いかで声かどうかが決まる。振動があるのは声。のどに手を当てて実感させる。

D

②日常語と言語変化について 「雰囲気」は，「ふんいき」という読みが本当だけど，30年後には，「ふいんき」と読むようになるのではというお話でした。その根拠に，「山茶花」を例に挙げられました。また，「ちげえよ」という言葉は，状態を表す動詞であることと，「ねえよ」「うぜえ」という言葉に似ているため同じように変化しました。

③発音と意識より「パン」の「ン」の発音は，後ろにつく言葉によって違うことがわかりました。「パンも」「パンだ」「パンが」「パン！」と何度も発音してみて，舌の位置がどこにあるか確かめることは，とても新鮮な勉強でした。普段何気なく言葉を発していますが，舌の方では，スムーズにしゃべれるように，次の発音がしやすいように準備をして位置を変えていることがわかりました。この学問は，音声学といいます。子どもの発音がおかしい時に，どこがおかしいのかがわかります。また，五十音図は，舌の位置が奥の方から前の方へなるように並んでいることがわかりました。

舌は，発音する時，とても重要な働きをしているんだと思いました。

E

3．発音・言葉のルール学生の時，音声学（英語科）の授業を受けていたこともあり，興味深いお話でした。日本語にも，五十音だけでは表せない発声のルールがあることがよく分かりました。言葉のルールで，今まで疑問に思っていたことがありました。

鳥を数えるときの，「何羽」についてです。小学校１年生の算数の文章問題で，「小屋の中にニワトリが２わ，小屋の外に４わいます。全部でなんばでしょう。」という問題がありました。答えに，６ばと書いている子がたくさんいました。説明するとき，

「(羽）わの前が「ん」がつくと，(羽）ばになるよ。」と言った後で，４羽の読み方は（よんわ)で,おかしいなと思っていました。今回,そのなぞ解きができたように思いました。でも，１年生の子どもたちに「わ」と「ば」の使い分けについては，理解してもらえませんでした。

4　感想文から得られること

受講者一人一人の感想文を見ていけば，当然個別の偏りはあるけれども，全体としてみたときに，講義内容のほぼすべてについてコメントが得られたことは重視してよいと思っている。不要

なものはないということの現れだと，一応は考えられるからである。ただ，応用のきかないような，単に知識としてのものへの反応は低い。たとえば，4（1）数字歌（漢数字だけを用いて和歌を書き記したもの）や6（3）特殊な地名の成り立ちなどがそうである。たしかに，現象自体が日本語の仕組みなり巧妙さなりを示すというよりは，発展性の低い個別的なものであった。

ほぼどの受講者も言及しているのが，国語辞典における語義解釈のありようと，発音（音声と音韻）に関することである。後者については，ある意味では，教員養成学部のカリキュラムにその種の講義（国語学概論・音声言語論等）が以前から組み込まれており，そこで展開されていそうな内容である。また，文学部等の言語学・音声学であれば必須の内容ともいえるものである。内容に立ち入れば「パンも・パンだ・パンが」における「ン」の発音が，それぞれ

〔m〕 唇を閉じる鼻音

〔n〕 唇は開くが，前舌が上の歯の裏・歯茎につく鼻音

〔ŋ〕 唇は開くが，前舌は活躍せず，後舌で閉鎖を作って発音される鼻音

と異なることをまず確認し，発音の実際と意識との相違について実感してもらい，さらに発音と文字との関係にまで言及することになる。これが意外にも新鮮な驚きをもってむかえられたのは，講義を設計したものとしては嬉しいかぎりである。もちろん，厳しい見方をするならば，言語学の基本であるだけに是非とも知っていてほしいことがらであるから，素直に嬉しがってもいられないのかもしれない。が，基礎力の底上げとでもいうべき課題があることを教えてくれていよう。

この種のことは，別の講義内容に対する感想からも見られることであり，それは，前掲講義内容と感想文（ことに後者）を見ていただければ，ある程度まではお分かりいただけるかと思うので，別のことについて記しておきたい。

一つは，「美しい日本語」という表現がちらほら見えることが注意される。これも意外であった。佐藤の研究者としての理念では，ある種の言語が「美しい」と評されることはないと思っているし，言語学を学んだものであればそのように教育されるのが普通である。言語を誠実に分析しようとするとき，どちらかといえば主観的判断に属する美的価値が介入・混入するようでは客観的な分析が望めないからである。また，言語が美的価値で云々する対象にはならないし，もし美的価値を導入するならイデオロギー的な偏りも発生しかねないことになる。したがって「美しい日本語」という表現も講義中ではすることはなかったはずである。ただ，日本語をよりよく知ること，世界にありとある言語と等し並みの価値を持つものとして見ること，といったことは言っていたはずである。そうした見方が，受講者個々の状況・前提・予備知識などをきっかけとして「美しい日本語」という表現を導き出したようにも思う。あるいは，アメリカの言語学者，B・L・ウォーフ（1897～1941）が，日本語の「象は鼻が長い」のような形容詞文を，「資格の異なる二つの主語が一つの述語に集約する美しい表現だ」（「言語と精神と現実」。池上嘉彦訳『言語・思考・現実』講談社学術文庫）と評価しているのを紹介したが，これがきっかけだったのかもしれない。ただ，この美しさも美学的価値のものではなく，いわゆる機能美としての美しさであり，言語という伝達手段における洗練に注目しての美しさと解すべきものである。ただ，それはそれとして，誤解されそうな述べ方なり，資料の提示方なりには十分注意すべきであると，改めて考えさせられた。

このウォーフの見解をめぐるコメントが一人からしか得られなかったのは，少々残念であった。これは，おそらくニーズがないために言及がなされなかったのではなかろう。特定言語を絶対視

しないという言語観がやや分かりにくかった，現実味を伴って意識されなかった，ということだと思っている。こうした視点は,こと言語の教育に（国語（＝日本語），外国語の別にかかわらず）たずさわる人には，持っていていただきたい見識なのであるが，あるいは，すでにそうした見識をお持ちだからとくに言及されなかったのかもしれない。また，佐藤の伝え方もあまり効果的とはいえなかったということもあろうか。講義の最後の方に設定されたため，少々疲労が現れたという現実的な問題もあるかもしれない。それならば，言及する時間帯を繰り上げたり，他の内容を刈り込むなどの処置が必要であることになる。佐藤としては，第1日講義としては欠くわけにはいかない内容であるから，今後もいくつかの点から検証しつつ，よりよく伝える努力をしていきたく思う。

感想文で何よりありがたかったのは，単に感想だけに終わるのではなく，受講した内容を咀嚼し，受講者の身の回りにおきる言語現象を解釈しようとする動きが見られたことであった（ＢＤＥ）。言語への知識が単に静的なものとしてとどまるのではなく，いわば活性化した興味・関心として働きはじめたことが確認できたわけであるが，これこそが，第1日の講義でねらっていたものである。知識の獲得・応用・適用というプロセスが動きはじめて，ようやく言語への興味・関心の深まりがはじまるというものであろう。

第２節ほかで述べたように，大学の講義めいたことを，現職教員のリフレッシュ教育段階ですることに，はじめは逡巡があった。が，このような状況からすると，おそれずに講義すべきであることが確実に知られた。